信州医誌，57(1)：3～6，2009

最 終 講 義 抄 録

皮膚科学から私が学んだもの

斎　田　俊　明
信州大学医学部皮膚科学講座

斎　田　俊　明　教授　略歴

1971年　東京大学医学部卒業，同附属病院皮膚科研修医
1972年　東京大学医学部助手（皮膚科）
1975年　埼玉県立がんセンター皮膚科医長
1980年　東京大学医学部附属病院分院皮膚科講師
1983年　東京大学医学部助教授（分院皮膚科科長）
1984年　Harvard 大学医学部（Massachusetts 総合病院）皮膚科客員研究員
1989年　信州大学医学部皮膚科教授
2006年　信州大学評議員
2007年　信州大学医学部附属病院副病院長
2008年　信州大学医学部附属病院がん総合医療センター長

主催学会・研究班活動等：
第12回日本皮膚悪性腫瘍学会総会会長（1996年）
第61回日本皮膚科学会東部支部総会会長（1997年）
厚生労働省がん研究助成金「メラノーマ班会議」班長（1995～1999年，2003～2007年）
Consensus Board, Consensus Net Meeting on Dermoscopy（CNMD）（2000年）
Scientific Faculty, The 3rd European Symposium on Teledermatology, Graz, Austria（2002年）
International Scientific Committee, The 1st Congress of International Dermoscopy Society, Naples, Italy（2006年）
Scientific Committee, The 1st World Congress of Teledermatology, Graz, Austria（2006年）
第20回日本色素細胞学会学術大会会長（2006年）
皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン作成委員会委員長（2004～2007年）
Vice President, 5th International Melanoma Research Congress, Sapporo（2008年）

受賞・称号など：
医学博士（東京大学，1983年），清寺真記念賞（1991年），The Best Doctors in Japan（2003-）

編集委員：International Journal of Clinical Oncology (Associate Editor), Journal of Dermatology, Japanese Journal of Clinical Oncology, Expert Review of Dermatology，日本皮膚科学会雑誌，癌と化学療法，皮膚病診療，信州医誌

主要編著書：「皮膚病理組織診断学入門」（南江堂），「悪性黒色腫の診断・治療指針」（金原出版），「メラノーマの病理組織診断」（文光堂），「今日の皮膚疾患治療指針・第 3 版」（医学書院），「皮膚悪性腫瘍取扱い規約」（金原出版），「カラーアトラス Dermoscopy」（金原出版），「皮膚疾患の最新医療」（先端医療技術研究所），「ダーモスコピーの診かた・考えかた」（医学書院），「皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン」（金原出版），「図説：必携ダーモスコピー」（金原出版，近刊）

主な所属学会・役職：日本皮膚科学会（東部支部支部長，皮膚悪性腫瘍指導専門医委員会委員長），日本皮膚悪性腫瘍学会（理事長），日本研究皮膚科学会（評議員），日本皮膚病理組織学会（理事），日本癌治療学会（評議員，選挙管理委員会副委員長），日本癌学会（評議員），日本臨床腫瘍学会（評議員），日本がん治療認定医機構教育委員，International Dermoscopy Society (Continental Representative), Society for Melanoma Research (Committee on Membership), International Society of Teledermatology (Board Member), American Academy of Dermatology, Society for Investigative Dermatology, International Society of Dermatology, American Society of Dermatopathology, International Society of Dermatopathology

主要研究分野：皮膚腫瘍とくに悪性黒色腫の診断と治療，皮膚病理組織診断学，Dermoscopy による色素性病変の診断，悪性黒色腫の免疫・遺伝子治療，発癌機構論

皮膚科学から私が学んだもの

斎　田　俊　明
信州大学医学部皮膚科学講座

私が信州大学皮膚科の教授に就任したのは1989年９月のことである。ちょうど，日本経済はバブルの絶頂期にあった。物価も給料も急上昇し，夜の東京・銀座ではタクシーを拾えない，というようなブームが到来していた。日本の不動産会社がニューヨークの一等地を買い占めた，というニュースも入ってきた。このブームのおこぼれにあずかって，私は当時，東京の多くの一流レストランの味を楽しむことができたのである。同年11月には「ベルリンの壁」が崩され（ちょうどこの壁が崩された日に私は，当時佐久総合病院の病院長であった若月俊一先生と会食をしていた！），旧ソ連圏は解体へと向かうことになる。長期間に亘った東西冷戦は，人間の欲望に根差した「資本主義」が勝利を収める形で終結した，ようにみえた。教授としての私の学問生活は，このような経済，社会，政治状況のもとで始まったのである。

その後20年が経過し，2009年３月私は皮膚科教授を定年で退職する。この間に何が起こったか。日本のバブルは間もなく，文字通り泡の如く消え，長い経済的低迷に陥ったのである。他方，グローバル化とかいうキャッチフレーズのもとに，資本主義が全世界を席巻し，ブッシュ，小泉のような政治家が権力を振るい，市場原理主義，能力主義，規制緩和などの政策を徹底した。国立大学の法人化，評価・点検，予算の傾斜配分・重点配分もその一つの現れであろう。「自己責任」という掛け声のもとに，歴然とした格差社会が出現し，派遣社員や医員とかいう劣悪な身分が尤もらしく定着した。そして，「金が金を生む」金融資本主義は軽々と国境を超え，搾取の構造は国際社会にも大きな格差をもたらした。

そうして起こったことは何か。新興宗教団体が街や地下鉄にサリンを撒き，ニューヨークの２本の高層ビルに飛行機が突っ込んだのである。すると，米国はイラクへinvasionし，たちまち征服して，軍服姿のブッシュは軍艦の上で高らかに勝利宣言をした。しかしその後も，憎悪の自爆テロは絶えることなく続き，おびただしい人数のイラク人と米国人が殺されたのである。あの勝利宣言とは一体，何だったのだろうか。優秀なハイテク兵器は人殺しの性能において抜群に優れているが，それがもたらすものは勝利ではなく，恐怖と憎悪とすさんだモラルである。決して平和をもたらすことはできない。しかも，それだけではない。優秀な兵器は途方もなく高価なのだ。何故，平気でこんな代物を競って作り，保有しようとするのだろうか。何という無駄遣いだろうか。挙げ句の果てに，財政逼迫だ，増税だと大騒ぎをしている。私は甘ちゃんの平和主義者ではないが，他国からの侵略に備えて武装するよりも，他国との平和的交流に努めた方がずっと安全で安上がりなのだと思う。

そしてごく最近，一人勝ちと思われていた資本主義のチャンピオン米国において，サブプライムローンとかいう仕掛けの化けの皮が剝がれ，何とかブラザーズという金融会社の倒産をきっかけに，世界経済が大混乱に陥ったのである。米国ではブッシュが退き，オバマが登場した。ブッシュに尻尾を振って，イラク侵攻を断固支持していた，どこかの国の政治家は，今度はどうするのだろうか。信州大学ではどうだろうか。「気配りの天才」の学長が，文科省の顔色を伺いつつ，あちこちへ向かって揉み手をしている（私も彼には随分と気を遣ってもらいました）。そして，附属病院に２億７千万円の赤字を残した前病院長は，長野県の病院事業局長に就任して，県立病院の経営改善を指導しているという。

私は，そして私の学問は，このような時流に飲み込まれなかっただろうか。学内外で発言すべきことを発言し，なすべきことをなしてきただろうか。学問領域についていえば，教授就任の当初，メラノーマの組織発生について*de novo*学説に基づくmelanoma *in situ*の存在を主張し，国内外の学会で大御所から袋だたきにあった。しかし今，melanoma *in situ* という概念と病変の存在を否定する学者は世界中のどこにもいない。掌蹠のメラノーマ早期病変の特徴的ダーモスコピー所見を発見することができたのも，*de novo* 学説が背景にあったからなのである。「時代は変わる。紆余曲折はあっても，事実は虚構を打ち破る」ということを私は学問をとおして学んだのである。

この間に，私が教授会メンバーや事務職員，出入り業者を怒鳴りつけたことは一度や二度ではない。私は

お酒を一滴も飲めないのだから，当然シラフでやったことである。また，教授会，科長会，評議会などで大演説をうって，ひんしゅくをかった回数も数知れない。冷静で聡明な後輩教授から「先生，寸止めということも大切ですよ」と諭され，自分の未熟さに恥じ入ったことがあるが，自らの見解の表明を封じ込めることはできなかったのである。しかし，そういう私であるのに，普段，教室員や学生などにあまりえばらないためか（本人はそう思っているが，事実はどうだか分からない），思わぬところで「やさしい人柄」だと誤解されることがある。やっかいなことに，本人も時々その気になったりするのだから，困ったものである。

さて，私は信州大学皮膚科の教授として，きちんと人材を育成してきただろうか。学生や教室員の能力を引き出す教育をしてきただろうか。自分のことを一番分かっていないのは当人なのだから，自己評価は難しい。しかし，私が教室を担当してから70人近くという多数の入局者があり，その大多数は立派な皮膚科医に育ってくれた。これは何よりも当人の努力によるものだが，それと同時に人格的にも学問的にも卓抜な力量を備えたスタッフ（准教授，講師，助教など）の協力があったからだと思う。私自身もスタッフからは実に多くのことを学んだ。そして，彼らも私から何かを学び取ってくれたかもしれない。このことこそは，共に仕事をするということの，最も大きな意味であろう。

国内外の学会・研究会へも教室員と共に頻繁に出席した。私は，これまでに国内のほとんどすべての都道府県で「メラノーマ」ないし「ダーモスコピー」について招聘講演を行っている。また，われわれのダーモスコピーの業績が国際的に評価されてからは，国際学会や外国の学会からシンポジウムや招待講演などを数多く依頼されるようになり，外国出張の機会も増えた。シアトル，ベニス，ニューヨーク，シドニー，バンクーバー，ローマ，チューリッヒ，グラーツ，ウィーン，パリ，ブリスベーン，ワシントンDC，レストン，ブエノスアイレス，Bangkok，Beijin，Kaohsiung，Daejeon，Seoul，Jejuなどなど。その際に同行した教室員との数々の楽しい経験は，私の人生を彩るかけがえの思い出である。

私たちの教室は国内では「メラノーマといえば信州大学」，国際的には「acral melanomaといえばShinshu University, Matsumoto」と評価されるようになった。余談だが，ワシントンDCでのダーモスコピー研究会の席で，私が“Today's my talk is not about acral melanoma!”と言って話を始めたところ，「エーッ」という声が上がり，結構，受けました。その研究会では，本当にacral melanomaについてではなく，何とbasal cell carcinomaのダーモスコピー所見について話をしたのです。いずれにしろ，皮膚科でもっとも患者死亡リスクの高いメラノーマを教室のメインテーマとしたことは正しい選択であったと思う。

私は，メラノーマという特殊な皮膚癌だけをひたすら研究し，考察してきた。正に専門バカもここに極まれり，といったところである。しかし，私はこのメラノーマの研究を通して人間や社会の本質を知ったような気がしてならない。一つのことを深く，深くどこまでも掘り下げていくと，遂には確かな核心に到達することができる。すると，突然に視野が大きく開けて，固有のテーマを超えた普遍的な仕組みが理解できるようになるのである。たった一つのことに集中していたにもかかわらず，ではなく，一つのことを極めたからこそ，すべての事物に通底する原理のようなものを体得することができたのではないだろうか。随分と大げさな表現を用いたが，これは私のいつわらざる実感である。そして，これこそが私が学問というものから学んだ最も大切なことなのである。

私は今，自分がやり残したものは何もないように感じている。これは多分，自己幻想の罠に嵌まっているだけなのだろうが，いずれにしても，私の役目は終えたのである。そして，私の後を継ぐ優秀な教室員達が，今後この分野において，必ずや実のある研究成果を続々と生み出してくれるであろうことを，私は確信している。

自分の教授生活と仕事に，そして自らの人生に納得し，満たされた気持ちで大学を去ることができることを，私は心から有り難く思っている。最後にこのような学者生活を送ることを可能にしてくださった信州大学医学部に深謝したい。 （2008年11月）